

事後評価報告書
(日本-タイ研究交流)

1. **研究課題名:** 「DigiTag2 法による結核菌の検出と型判別を目的とした DNA チップの開発」

2. **研究代表者名:**

日本側: 東京大学大学院 医学系研究科 教授 徳永 勝士

相手側: Mahidol University, Siriraj Hospital, Faculty of Medicine, Department of Microbiology,
Associate Professor, CHAIPRASERT, Angkana

3. **総合評価:** A

4. **事後評価結果**

(1)研究成果の評価について

タイ側との共著論文を国際誌に発表していること、国際学会・国内学会において共著として14件の発表を行っていることは高く評価できる。また、目標の結核菌ゲノム解析だけでなく、タイにおける結核菌遺伝型の分布を同定しており、日本側がタイのリソースを有効に研究発展に利用している点からも、国際共同研究による相乗効果が出ていると判断できる。さらに、本交流事業の継続に相当する予算獲得にもつながっており、今後の発展にも期待できるだろう。

しかしながら、データ提供だけがタイ側研究者の貢献であったように見え、また、計画されていた結核菌SNPs型情報と宿主側SNPs情報の臨床情報分析が未了であったことは、残念な点であった。加えて、DigiTag2法で作成したDNAチップ法に関して言えば、改良に関する特許出願も可能だったのではないだろうか。

(2)交流活動の評価について

日本側が開発したハイスループットな結核菌判定法を用いて、国内持ち込みが困難な病原体に関して、タイで網羅的に集めてゲノム解析する研究が実施可能になったことは高く評価できる。日本側及びタイ側チーム主催のワークショップ（プロジェクト全体会議）の2012～2015年にかけての定期的・継続的な実施、日本からタイへの定期的訪問もあり、若手研究員の育成にも寄与していると考えられる。

一方、タイ側の学長など 首脳来日による大学間協定・再締結協議に貢献できたことは大きいものの、タイ側研究者の来日が限定的であったことは残念である。

(3)その他

計画の管理が行き届いているとの印象を受けた。また、SATREPSの課題採択につながり、2016年度以降も結核菌ゲノム解析研究が継続できており、今後の発展に期待したい。